樋爪館
比爪館
肥爪館
火爪館

ひづめだて

2014.12.24
第42号
赤石地区
ひづめ館懇話会

事務局 〒028-3309紫波町日詰駅前1-10-2赤石公民館内 tel 019-676-3999　会長 高橋敬明 tel 090-3125-3776

奥州藤原氏とは (3)　— 岩手県立博物館テーマ展『比爪-もう一つの平泉-』パンフレットより —

比爪の奥州藤原氏である「清綱」、「俊衡」らの家系を「平泉」と区別するために「比爪氏」と称することがありますが、俊衡らが「比爪」の姓を名乗った事実はなく、また、「比爪」という「名字」を代々名乗っていたとは、「名字」の確立・定着年代からすると、考え難いことです。

「名字」が一般的に定着するのは12世紀末以降（鎌倉幕府成立以降）であり、一代限り名乗りである「字(あざな)」としての「比爪」と代々踏襲する「名字」とは区別すべきものです。

このように比爪も奥州藤原氏であり、「比爪氏」ではなく「比爪系奥州藤原氏」と表するのが妥当です。

≪≪≪　1～2月行事予定のお知らせ　≫≫≫

1 月21日 （水曜日）	第58回月例懇話会	午後７時から午後９時まで　赤石公民館 発表者 ： 平 井 和 夫 テーマ ：「斯波氏について」 発表者 ： 高 橋 敬 明 テーマ ：「比爪系奥州藤原氏」－県博テーマ展から－
2 月18日 （水曜日）	第59回月例懇話会	午後７時から午後９時まで　赤石公民館 発表者 ： 中 野　宏 テーマ ：（ 未 定 ） 発表者 ： テーマ ：

―― ◇ ―― ◇ ―― 第13回 定 期 講 演 会 ―― ◇ ―― ◇ ――

１１月３０日、八木光則氏を講師にお迎えし第13回定期講演会「比爪館跡と板碑群」を開催しました。参加者は42名でした。当日の講演の概要と冒頭の部分の内容をご紹介します。

1　比爪館跡　　(1) 比爪館跡の構造　(2) 柳の御所との比較
2　斯波の板碑群　(1) 板碑(石卒塔婆)　(2) 板碑の分布からみた斯波の有力寺院

1－(1)－1)　発掘調査で判明した構造

① 沖積地の微高地に立地し、周囲を大溝で囲み、その内側に土塁を構築か。
② 遺跡の北部と西部を板塀で区画（延長175cmを確認）。
③ 北西部は４期以上の変遷をもつやや大形の四面廂建物（主殿級建物群）などを配置（都合５棟以上の四面廂建物）。
④ 北部中央は２期以上の四面廂建物群（都合５棟）と宝形造建物（仏堂）、井戸群で構成。
⑤ 南西部に土塁状や中島状の高まりがあり、池の汀線とみられる段差が確認され、苑池を配置か。
⇒ 防御機能より政務や饗宴を主とする居館。

青森・秋田方面研修旅行に参加した会員の宇部真澄さんに、お願いしていた紀行文をいただくことができました。今回と次回の２回に分けて掲載します。なお、シリーズ「比爪館跡の発掘調査」は一時お休みとし、２月下旬の№44号から再開します。

比爪館から奥大道の終着点外ヶ浜まで（上）　　宇部真澄

去る九月二日から三日にかけて、「『比爪　もう一つの平泉』を追って　羽柴先生と行くツアー」と題する秋田、青森両県へのツアーが紫波観光交流協会の主催、赤石地区ひづめ館懇話会、紫波郷土史同好会、紫波町平泉関連史跡連携協議会、しゃ・べーるの四団体の共催で行われた。

二日間にわたるコースは、比爪館の御膝元、赤石公民館から一路北上、青森県七戸町のコンニャもり遺跡、歴史資料館、七戸城、そして東八甲田温泉泊、翌日は青森物産館アスパムの展望台、浪岡町の浪岡城と中世の館、碇ヶ関、それから秋田県に入って大館市の矢立廃寺跡、大館郷土博物館、錦神社、そして帰路、という盛沢山なものだった。

さて、それらを見学順に少し詳しく追って見ると……。

まず七戸町までのバスの中では、県立博物館学芸員である羽柴先生が、用意して下さった資料「北奥における奥六郡・平泉文化の流入過程」をもとに、これから向かう見学地がどういう意義を持つ所か、いろいろレクチャーして下さった。熟年参加者二十一名、早くも熱心な学習モード。

バスが進むにしたがって、一戸から九戸までの名称の由来なども自然に話題にのぼり、バスの中は同級会のように和気あいあい。

さて、七戸町に到着してまずは昼食、終わると町の小山学芸員が待ち受けていて下さり、初めに「コンニャもり遺跡」に案内して下さった。そこは小さな案内板が立っているだけで、説明付きの案内人がなければ、林の中のちょっとした台地、ぐらいにしか見えない。「この丘陵地と積石塚遺構を総称して『コンニャもり』と呼んでいる。コンニャもりの俗称の由来は、皇女杜(こうじょもり)がなまってコンニャもりになったとも言われている。」と頂いた資料に説明されていた。

続いて七戸町文化交流センター(統合したあとの小中校校舎を利用している)内の歴史資料館で小山氏のレクチャーを受けた後、各資料室を案内して頂く。そこで二ッ森貝塚の遺構、またコンニャもりから出土した常滑の壺や、かの有名な遮光器土偶と対面、感動。でも、土偶が思ったより小ぶりなのは予想外だった。それにしても、この資料館は見学しやすいように実によく整備されていて、しかも膨大な出土物の陳列に、我が紫波町にも、このような施設があったらと、ため息まじりの見学者たちだった。

そこから七戸城址に向かう途中、ぜひ寄ってくれとて、小山氏が案内したのは、県指定天然記念物の銀南木(いちょうのき)。ここは松島の瑞巌寺の前身となる寺を興した臨済宗の名僧、法身国師がこの地に来て５つの庵をつくって求道の地としたという五庵川原のすぐそば。そびえる銀南は樹齢七百余年、幹回り十二メートルという巨大なもの、無数の乳垂がたれて、確かに一見の価値あり。

そして七戸城址。ここも実によく手入れが行き届き、見学したこの日も、多くの作業員の人たちが草刈りや整備に励んでいた。あちこちに立てられた標識も案内板もしっかりしていて、ここで小山氏の弁舌は絶好調となった。この城址を保全するためにどれだけ作文して、どれだけあちこちから補助金をかき集めたか、面白おかしく説明していたが、この史跡保全のために並々ならぬ情熱を傾けているのがびんびん伝わって来た。

こんな情熱学芸員が紫波にも……、と皆きっと思ったに違いなかった。　（次号に続く）